

「教訓学びに被災地来て」

〈宮城〉自然災害の風化を防ぎ、教訓の伝承に役立てるため、東日本大震災で大きな被害に見舞われた南三陸町で、「東北被災地語り部フォーラム2019」が、24、25の両日、開催された。テーマは「あの日から10年・100年・1000年先の未来へみんなが語り部」。「南三陸ホテル観洋」を会場に、24日には同町内の遺構などをめぐる「語り部バス」や、パネルディスカッションが行われた。

(塔野岡剛、写真も)

南三陸で「語り部フォーラム」

フォーラムが同町で開催されるのは平成29年以来2回目。この日は阪神大震災の被害を受けた神戸市の伝承団体や語り部など、県内外から約400人が参加した。

語り部バスは、津波の被害を受けた町立戸倉小跡地、震災時に地元住民ら327人が避難した結婚式場「高野会館」、職員らが犠牲となった南三陸町防災庁舎などをめぐった。

パネルディスカッションは「みんなが語り部く語る」ことの意味」と題して開催。同町の語り部など4人が登壇し、「災害を自分の身起こること捉えてほ

しい」「過去の災害から学ぶ姿勢が重要」「教訓を学びに被災地に来てほしい」などと語った。

語り部バス、パネルディスカッションともに参加した新潟市の女性(58)は「沿岸部の被災地には初めて来た。高野会館では避難した人々の思いが伝わった。見たもの、聞いたことを伝え

ていきたい」と感想を話した。

ホテルの阿部隆二郎副社長(58)は「震災から間もなく8年だが、防災・減災の意識を持っている人々が多いということがうかがえた。こうしたフォーラムを通して全国の被災地のネットワークが広がってほしい」と語った。



「語り部バス」は震災当時327人の地元住民らが避難した結婚式場「高野会館」などを巡った
=24日、南三陸町